

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月26日現在

機関番号：34504
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2015～2018
 課題番号：15K02397
 研究課題名(和文) 18世紀フランスのリベルタン文学と版画がフランス革命に果たした役割についての研究

 研究課題名(英文) A Study on the Role Played in the French Revolution by the 18th Century French
 Libertine Literature and Prints

 研究代表者
 関谷 一彦 (SEKITANI, Kazuhiko)

 関西学院大学・法学部・教授

 研究者番号：40288999
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果として、拙著『リベルタン文学とフランス革命』関西学院大学出版会、2019を出版した。

本書の結論は、リベルタン文学のフランス革命への直接的な影響を指摘することは難しいが、間接的な影響は間違いなくあったというものである。読書行為がフランス革命へと直結するわけではないが、教権の墮落を描き、王権の聖性を剥ぎ取ることにより、リベルタン文学は貢献したはずである。リベルタン文学が、18世紀フランスでよく読まれたことを考慮すると、フランス革命に与えた影響は、間接的であるにしても、大きなものがあったというのが結論である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リベルタン文学がフランス革命にどのような影響を与えたのかを考察した研究はこれまでになかった。17世紀のリベルタン思想が18世紀の啓蒙思想に深く入り込んでいる思想の流れの研究は注目されているが、モラルの逸脱、とりわけ性的モラルの逸脱を描いたリベルタン文学は猥雑なものとして評価されてこなかった。しかしながら、フランス革命に与えた影響を明らかにすることによって、その役割に正当な位置を与えることができる。拙著『リベルタン文学とフランス革命』で明らかにした研究成果は、文学研究者のみならず、歴史学や社会学的なアプローチも可能になるような学際的な要素を秘めている。

研究成果の概要(英文)：The result of my research was published as Riberutann Bunkgaku to Furansu Kakumei (Libertine Literature and the French Revolution) by Kwansei Gakuin Publishers in 2019.

While it is difficult to establish that Libertine literature directly influenced the French Revolution, I conclude there is no doubt about its indirect influence. The act of reading was not directly connected with the French Revolution, but Libertine literature contributed with its description of the corruption of the Church and by stripping the crown of its sanctity. I argue that considering how widely Libertine Literature was read in 18th century France, we can conclude that though indirectly it exerted a significant influence on the French Revolution.

研究分野：フランス文学

キーワード：18世紀フランス文学 リベルタン文学 リベルタン版画 フランス革命 サド 『女哲学者テレーズ』 『ドン・B***の物語』 クレヴィヨン・フィスとティドロ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地下文書としての「リベルタン思想」の研究は、フランスで継続的に刊行されている *La Lettre clandestine* (PUPS)のみならず、日本でも『啓蒙の地下文書』IとIIの刊行を始めとして、翻訳や研究が進んでいる。それに対して、同じ地下文書でも、「リベルタン文学」の研究はフランスでも遅れているし、日本では目立った研究がない。その理由は、猥褻であるとして研究対象から排除されてきたからである。しかしフランスではプレイヤッド版で *Romanciers libertins du XVIIIe siècle* (『18世紀のリベルタン小説家』、第1巻2000年、第2巻2005年) やサドの諸作品が出版され、Michel Delon, Jean Marie Goulemot, Patrick Wald Lasowski, Jean-Christophe Abramoviciらの研究によってようやく学問対象として認知されつつある。日本ではサドの作品を澁澤龍彦が精力的に紹介したが、その紹介は秘教的作品が中心であり、また抄訳が多いためサドの全体像、ましてやリベルタン文学の全体像を明らかにするまでには至っていない。

歴史学研究では、ロバート・ダントンはリベルタン文学がフランス革命前にはベストセラーの一つであったことを明らかにし、フランス革命を準備した一つの要素であると指摘している (Robert Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982)。しかしながら、具体的にどのように受容され、意識変革を促し、社会に浸透していったのかは明らかになっていない。リベルタン文学についての文学研究からのアプローチは非常に遅れており、日本ではリベルタン文学の紹介すらほとんどなされていないのが現状である。先行するフランスでの研究成果を踏まえて、リベルタン文学を紹介するとともに、リベルタン文学がフランス革命にいたる意識変革に果たした役割についての研究は文学という個別研究の枠組みを超えて、思想、歴史、社会に関わる重要な問題である。

2. 研究の目的

「リベルタン」という語は、17世紀では形容詞「自由思想の」、また名詞「自由思想家」という意味で使われるが、ここで言う「自由」とはキリスト教のスコラ哲学からの逸脱と深く関わっている。17世紀の終わりから18世紀になると、「リベルタン」という語には「放縦な」、「放蕩な」、「卑猥な」という意味の形容詞、および「放縦な者」、「放埒な者」、「放蕩者」という名詞が付加される。キリスト教思想からの逸脱がキリスト教の道德規範にとらわれない者へ、そして道德規範からの逸脱が性的モラルの逸脱へと変化し、放蕩者となる。このような「リベルタン」という語の意味の変遷、またリベルタン文学の流れから読みとれるのは、キリスト教が作り上げたスコラ的な既成の秩序を逸脱した、反キリスト教的、反宗教的な意味から、既成秩序であるキリスト教モラルから逸脱した、非道德的、反逆的な意味である。ラゾウスキーも「リベルタンとは根本的に放埒な(規則を逸脱した)行いをする者である」と述べて、この語がもつ反逆性に注目している。こうした点を踏まえて、反逆性を内在するリベルタン文学が、18世紀フランス社会でなぜよく読まれたのか、何が読者の関心を惹き付けたのか、読者の意識変革に何らかの役割を果たしたのかを分析することによって、フランス革命にどのような影響を与えたのかを考察することを目的とする。

さらにリベルタン版画に関しては、『女哲学者テレーズ』で版によって異なるさまざまな版画を紹介し、『閨房哲学』でも解説したが、それ以外の作品の版画はほとんど紹介されていない。そのため、まずは版画の紹介に努め、それらを比較検討してリベルタン版画がどのような役割を果たしたのかを分析する。日本の春画が1990年代に至るまでほとんど顧みられなかったように、フランスでも猥褻を理由にリベルタン版画は重要なものとは見なされてこなかった。しかし、春画が見直されてきているように、リベルタン版画も研究対象とすべき領域であり、また

日本の春画とフランスのリベルタン版画との比較研究はそれぞれをより相対化することができるだろう。リベルタン版画は、テキストを読めない読者にまで物語内容を伝えることが可能であるので、その役割を明らかにすることも本研究の目的である。

3. 研究の方法

初年度は、リベルタン文学を作品リストにして、重要な作品を読みこむことで全体像を把握することに重点をおき、また資料の収集を行った。2年目以降は、作品の読解を継続するとともに、集めた資料をもとにリベルタン文学の全体像の把握に努めた。また、リベルタン文学のなかでもっとも猥褻な作品として名高い『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』の翻訳に着手し、リベルタン文学が18世紀フランス社会に与えた影響、とりわけフランス革命に与えた影響について分析した。さらに、資料の収集を継続するとともに、資料の分析によって、リベルタン文学の全体像を再検討した。版画資料については、18世紀フランスのリベルタン版画をルネッサンス期や17世紀のエロティックな版画、さらには日本の春画などと比較研究を行った。最終的には、『リベルタン文学とフランス革命』にまとめて出版した。

4. 研究成果

拙著『リベルタン文学とフランス革命 リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか?』（関西学院大学出版会、2019）を出版して、研究成果を発表した。その概要は以下のとおりである。

本書のテーマをもっともわかりやすく説明しているのは、副題の「リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか?」である。この副題は、歴史学の問題である「フランス革命の起源」の問題と結びついている。モルネが提起し、ダントンの発展的に修正し、シャルチエが疑問を投げかけた歴史学の伝統的な問題である。本書では、歴史学上の議論を踏まえながら、リベルタン文学に焦点を絞ってフランス革命への影響を考えている。一言で言えば、「フランス革命の起源」の問題を文学的にアプローチしようとする試みである。

多くの読者は「リベルタン文学」という耳慣れない言葉にまず戸惑うかもしれない。「リベルタン」という名詞は、17世紀フランスでは「自由思想家」、18世紀では「放蕩者」を意味したが、「リベルタン文学」の定義は曖昧である。クレピヨン・フィスやラクロから、サドの作品まできわめて幅広い作品を含む文学ジャンルであるため、境界線をどこに定めるのか、定義によって変わってくるからだ。われわれは「リベルタン」の語源に遡りつつ、歴史的概念形成に注目して、「性を内包した、反逆的な文学」と定義した。その「反逆」はキリスト教が説くモラルに向けられている。しかもその矛先は「性的モラル」である。ではなぜ批判が「性」に向かったのだろうか? 1740年頃から「リベルタン文学」は盛んになり、デイドロもヴォルテールも「リベルタン文学」に手を染める。それには時代精神も深く関係しているだろう。

本書では、「リベルタン文学」のなかでも中核的な役割を果たした作品に、焦点を当てて分析している。その分析対象は、「リベルタン文学」の先駆者であるクレピヨン・フィスの代表作である『ソファ』、デイドロの『不謹慎な宝石たち』、18世紀のフランス文学でもっとも猥褻と言われている『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』、性と哲学が一体となった『女哲学者テレーズ』、マリー=アントワネットの性を攻撃する「中傷パンフレット」、フランス革命を映し出しているサドの『閨房哲学』などである。また、これまであまり研究がなかった「リベルタン版画」についても一章を割いている。とりわけ版画については、日本の春画と比較しながら検討をした。春信や歌麿が活躍したのも同じ18世紀であり、共時的な比較から

それぞれの版画の特徴がよく読み取れるからである。

また本書では、これまで「啓蒙の世紀」と言われてきた18世紀フランスが、「哲学」と「理性」の世紀だけでなく、「快樂の世紀」であることも明らかにしようとしている。「理性」と「快樂」は相容れないように考えられがちであるが、18世紀フランスは両者を見ごとに体現しているからだ。われわれはこれまで「啓蒙の世紀」として強調されてきた18世紀フランスのバランスをとるために、「快樂の世紀」を強調したい。

では、「リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか？」という問いの結論はどうなったのだろうか。残念ながらわれわれの分析から、リベルタン文学のフランス革命への直接的な影響を指摘することは難しい。しかし、間接的な影響は間違いなくあったと言えるだろう。「性」をテーマにしたリベルタン文学と版画は、あの世からこの世への視点の移動を促し、人々の関心を現実世界に向けさせることに貢献したからだ。しかしながら、「現実注目することで、不公平や不平等という怒りを生み出し、こうした怒りは社会批判へと向かう」という筋書きはあまりにも短絡的で、危険でもある。そこには、リベルタン文学の読者がどのように読み、何を内面化し、どのように変化したのかが抜け落ちているからだ。

読書行為がフランス革命へと直結するわけではないが、教権の墮落を描き、王権の聖性を剥ぎ取ることに、リベルタン文学は貢献したはずである。リベルタン文学が、18世紀フランスでよく読まれたことを考慮すると、フランス革命に与えた影響は、間接的であるにしても、大きなものがあったというのがわれわれ本書の結論である。

「快樂の世紀」は批判の矛先をなぜ「性的モラル」に向けたのだろうか？「性」と「批判」には何らかの普遍的な結びつきがあるのだろうか？「性」はいつの時代でも権力による取り締まりの対象であったが、なぜ権力は「性」を取り締まるうとするのだろうか？「性」には権力を脅かす要素があるのだろうか？こうした疑問についても本書では検討を加えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

関谷一彦「リベルタン文学とフランス革命—『女哲学者テレーズ』を通して—」『言語と文化』、第21号、査読無、関西学院大学 言語教育研究センター、2018、95-112

関谷一彦「リベルタン文学と政治的中傷パンフレット」『外国語外国文化研究』、XVII、査読無、関西学院大学法学部、2017、99-117

関谷一彦「翻訳のむつかしさ—サドの『閨房哲学』を訳して—」『言語と文化』、第19号、査読無、関西学院大学 言語教育研究センター、2016、63-77

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

関谷一彦『リベルタン文学とフランス革命 リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか？』関西学院大学出版会、2019、240

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。